

書評と紹介

ほうがむしろ表面的な学問像に囚われているのではないかと、反転して問いかけられるこの時代における責務の重さに思い至るのである。

池上良正著

『死者の救済史——供養と憑依の宗教学——』

角川書店 二〇〇三年七月三十一日刊
四六判 二六六頁 一六〇〇円＋税

梅屋 潔

周知のように、著者池上良正氏は『津軽のカミサマ——救いの構造をたずねて』（どうぶつ社、一九八七年刊）『民俗宗教と救い——津軽・沖繩の民間巫者』（淡交社、一九九二年刊）『民間巫者信仰の研究——宗教学の視点から』（未来社、一九九九年刊）など、東北や沖繩地域などフィールドとの対話を通じて堅実な成果をまとめてきた碩学である。本書は、その著者にとって始めて一次資料を主たる材料にしている著書であり、文学、歴史学、民俗学、人類学など著者の専攻する宗教学の立場からすると他分野の専門家の仕事をつなぎあわせることによって「苦しむ死者」たちとの、つきあい方を展望しようとする

宗教史ないし比較宗教論の試みである。おいおい触れていくが、その内容は多岐に渡っており、大きく分けて宗教史についての独自モデルの妥当性の検討、「死者」との関係に基づいた宗教研究の比較パラメータの提出、さらには憑依の認識論的見直しなど欲張ったものである。

従来の宗教史のある立場では「祖先崇拜」と「シャーマニズム」を軸に日本の一般庶民の宗教を俯瞰することができると考えられていた（七一―一二頁）。しかしながら、どのような概念でもそうであるように、手垢がついて便利であればあるほど、厳密な定義からは程遠いものになる。また厳密な定義が現象の実態に肉薄できるといふ保証もない。「祖先崇拜」の場合も「シャーマニズム」の場合も例外ではない。

とりわけ頻繁にフィールドに足を運び、生の事象と切り結んできた筆者にとり、この二つの観念はむしろよそよそしいときえ思われたかもしれない。事実を目前にしてそれに対して誠実であろうとすれば、生きられた現実を、実体的なものとして固定化してしまう、あるいは逆に実体のない、あるかどうかもわからない「原型」という理念型に固執して押し込めてしまうといった、ひとことではいえば本質主義的誤謬を回避することが必要である。「祖先崇拜」や「シャーマニズム」といった学術的な分野の固定化は、その実体制側の権威づけのプロセスの過程と社会的成層化の産物という側面もあり、著者の捕捉しようとする死者と生者の交渉という現象の本質を見誤る要素を含んでいるのである。

たとえば「祖先崇拜」を見てみよう。著者によると、一般に十四世紀から十六世紀、つまり中世後期から応仁の乱を分水嶺として、日本の社会とりわけ心性は大転換を遂げたといわれる。これらは十五、六世紀を頂点とする仏教の葬祭化が全国展開していく過程と軌を一にしている。そのころの修羅能などに登場する怨霊や亡霊は非力な弱者として描かれ、もはや生者と対等に交渉する力はない。敷衍すると、「祖先崇拜」は、こうしたエリートである武家たちと既成仏教が結託して作られた時代の産物としての他界観をその背景にもっている(九〇―一二〇頁)。つまりこうした視野からは、ある層の民衆が抜け落ちてしまうのである。「シャーマニズム」についてもほぼ同様のことが言える。同じ現象であつても主体や話者、記述媒体、そしてそれらの位置関係によつてしばしば差別的に「異教の神」の「憑依」、あるいは巫女の系譜に連なるものとしてその対象が限定されてきた。

しかし、本書で紹介される説話集などに現れた「死者」や「天狗」などの生者との「個別取引」には、善悪二元論には還元できない「憑依」の本来的な豊かな意味領域を認めることができる。たとえば、現世を超えた霊威的次元との接触、そこからの情報を入手する回路として「夢」という表記がしばしば見られる。これは、「うつつ」と対比され、何らかの形で「眠る」ことを前提としながらも、瞑目した状態や忘我状態まで含んだ幅広経験や出来事の表記に用いられた。ところがそれらの説話集では、体験の権威性を保持するためあつて「憑依」を連想させる「つく」という語彙は用いられていない。同一内容

の体験であるにもかかわらず著名な仏僧であれば「夢」や「示現」と記され、名もない在家の婦人であれば「憑かれた」と記録された可能性がある(一九六―二二四頁)。

こうした体験を描くテキストを資料として民俗宗教を考えるなら、そこで、「日本語の表記なら「つく」「かかる」「おりる」などの言葉で、あるいは震え・自傷行為・意識喪失といった独特の身体的・心的反応を伴って、「憑依」がひとつの完結した実体であるかのような印象を定着させてきた慣習的表現法」(一七六頁)として記述の領域を区画化していったプロセスを洗い出し、今一度再考しなければならない(二五八―一九四頁)。

つまり、一部の階級によつて作られた時代の産物に依存することなく、外来の世界宗教である「仏教インパクト」以後、仏教が普及・定着する過程で洗練・強化される動態を捉える比較宗教学的な視点を民衆宗教史につけ加えるためにも、「夢」や「示現」、仏の道に通じながら現世への執着や驕慢ゆえに解脱できなかった「天狗」との交流、あるいは行者仏教のような形で仏教に歩み寄る巫女たちの経験の示唆する本来の豊かな意味領域を回復するためにも、「祖先崇拜」や「シャーマニズム」の限定枠を拡大する新しい道具立てが必要だったのである。

そこで、この「祖先崇拜」「シャーマニズム」という従来の二つの用語を池上氏は汎用性の高い次の用語に言い換えることになる。「供養」と「憑依」がそれである。それぞれ死者への対処と死者との対話という「個別取引」を意味する。「供養」

書評と紹介

とは「うらみ苦しむ死者」「浮かばれない死者」を「安らかな死者」に昇華させる過程であり方法である。「浮かばれない死者」たちは「祟り」という形でメッセージを送ってきたし、その解決のためにはしばしば、「憑依」という霊威的次元の存在との直接的な意思疎通の回路が用いられた。

このように見ると民衆宗教の歴史は、「霊的な対象との「個別取引」と、世界宗教による「普遍主義化」の動きとの葛藤・共存・融合」(九頁)の過程としてとらえることが可能となる。それは在来の「個別取引」を重視する神仏、祖霊、死霊などとの直接的対話や個別祭祀の体系が、「個別取引」を抑制する教義を有する仏教、キリスト教、イスラームなどとの出会い、抑制されながらも全否定はされず、洗練・強化されてゆく相互作用であり、弁証法的な過程である。本書に紹介されるその流れを一瞥してみよう。

著者はこうした過程を視野に入れるために共存し併用される二つのシステムを導入し、対比する。それは「祟り―祀り／穢れ―祓い」システムと、「供養／調伏」システムである。前者は仏教以前から日本で行なわれていたことが推測される、祟る死者は祀り、穢れた死者は祓いのける思考・行動体系で、この場合は相手が祀るべき優れた霊威なのか祓うべき穢れたそれであるかを「個別取引」をして判断する。この場合、地縁・血縁を基盤とした共同体に根ざした柔軟な状況判断を行なう点に特徴がある。一方後者は仏教伝来以降形成された仏教的功德を「廻向」して、仏法の力で善導・教化(ときに撃退・排除)する本来は「普遍主義」的なものである。これは部分的に前者と

は相容れないが、前者を正面から否定せず、むしろ巧みに接合し、在来の「祟り―祀り」の上に「供養」を、既存の「穢れ―祓い」の上に「調伏」をかぶせる形で共存し、成長を遂げた。仏教の定着の成功を考えるうえで、「苦しむ死者」「ねたむ死者」「祟る死者」といった怨念へ対処するという土着の課題に応ええたと側面を見落とすことができない、というのである。

仏教の、自我に執着するかぎり六道のなかで因果応報の輪廻を繰り返すという前提のもと、正しい教えを実践して解脱することを目指す救済論(輪廻転生)と正しい仏教的実践による功德は他者にも振り向けることができるという考え(追善廻向)は、「浮かばれない死者」を「安らかな死者」に変換するために、生者の法要、念仏、写経、寺への寄進などの積徳行為が有効であるという理論的基盤となった。「輪廻転生」の論理は、中世末から近世にかけて、鄉村制村落からイエ制度といった社会の変化と対応する意識の変化に対応して、「前世の因縁」が「先祖の因縁」に変質することで深く浸透していった。「追善廻向」の論理に基づく死者供養の技法としての成功は、逆説的だが普遍的な論理で死者(先祖)との「個別取引」の技法を是認したことにより、「供養」というシステムは、旧来の「祟り―祀り」システムをモデルとして温存と共存をすることになったのである。

具体的には、平安後期から鎌倉時代の説話集などから、日本の中古から中世の「祟り―祀り」システムと「供養」との葛藤と融合のダイナミズムを読み取ることができる。それらにみら

れる教化のプロセスをまとめると、次のような意味を持つという。第一に仏教は従来は「死者」と「生者」の（より根源的にはカミとの）個別な関係の歪みとして捉えられた災因論に対して「因果応報」「追善廻向」などの普遍原理を提示した。第二に集団の権威に由来する従来の「祟り―祀り／穢れ―祓い」システムに対し、個人の積徳行為による対処を可能にした（これが事実上「個別取引」の是認である）。第三に、説話に見る「個別取引」の主導権は次第に「生者」の側に引き寄せられ、「死者」は相対的に弱者として描かれるようになった。『法華驗記』における信濃の長官某は、因果によって憎みあっていた蛇とネズミを一日のうちに法華経を筆写することによって救い、「輪廻転生」させる。こうした「供養」は、当事者だけでなく第三者からの介入を可能にした一例である。他にもたった一度だけ高僧の読誦を聞いただけで地獄での刑期が減ぜられて蛇に転生し、さらに妻に「追善廻向」してもらったことによって天へと生まれかわるなど、仏教伝道僧たちの説法には「生者」の優位性とその追善行為にすぎらうとする「弱者」の地位に封じ込められた死者像が見てとれる。もっともこの傾向が特化したのは修羅能の謡曲文学などに登場する弱々しい死者である。これは殺生に生きる武家に対して精神安定剤的機能を果たすことでそのニーズに適合した修羅能の性格からも必然的なものである。「死んで霊になる」という記述表現は同じでも、ここには「怨霊」とはまったく異なった存在に対するイメージが構想されているのである（九〇―一二二頁）。

こうした二つのシステムの共存は必ずしも「世界宗教」とし

ての仏教の教義や、高僧の思想に沿ったものではなかったが、「死者」との「個別取引」を「生者」が行なって「成仏」させることを「方便」として容認し、可能にするような形で進行之し、あまつさえ専らそれを業務とするようになった。この過程が「仏教の葬祭化」のもうひとつの側面である。このあたりの議論は正しい教義や高僧の思想に基づく宗教思想史では捉えられないダイナミズムであり、本書の真骨頂であるといえる。

著者の記述の粗密にはばらつきがみられるが、この二つのシステムを中心としたモデルは中世にとどまらず、それ以前についても、近世以降、近代のさまざまな事象に対してもその妥当性が試されている。「考察への手がかり」（一一〇頁）として、このプロセスの近世以降の展開のひとつ、版木印刷の普及や娯楽芸能の大衆化により商品化され、『雨月物語』（一九七七年）を頂点とする『百物語』として、十九世紀には三遊亭円朝の『牡丹灯籠』や鶴屋南北の『東海道四谷怪談』など歌舞伎・芝居・小説・狂言・舞踊・講談の怪談が紹介されている。中でも百物語で定番のひとつである怨霊譚の物語は一見ワンパターンな構造を持っているがその筋には分かれ道があり、個々の結末は予想がつかないという特徴がある。この点は従来の怨霊譚から引き継がれた構造で「祟り―祀り／穢れ―祓い」システムの持つ相手との微妙な力関係で対処を決めねばならない「個別取引」の性格を残したものであるという。

近世以降のもうひとつの新展開は、「浮かばれない死者」を「安らかな死者」に変えるのではない、功成り名を遂げた人物

書評と紹介

の生前の徳を称える「顕彰」の登場である。これらが強固な社会集団の意思と権威・権力を背景に汎用化されたのが、近代国民国家体制下での「戦死者」であった。

そこから敷衍される現代的な事例として、第二次世界大戦中に戦死者に対して「英霊奉斎」「英霊祭祀」が共同体の集団性と国家や天皇の権威を背景に行われる一方で（すなわち、祀る）、東北地方のイタコの口寄せなど「憑依」という「死者」との「個別取引」を通じて個人的に戦死者の思いを聞き届ける〈供養〉が活発化した現象（九〇―一二一頁）に暗示された二つのシステムの絡み合いが見てとれる。また、二〇世紀後半キリスト教に起こった「霊の戦い」などの「聖霊運動」、民俗宗教の側の巫女たちの行者仏教への歩み寄りなど（二二六―二六三頁）の分析にもダイナミックなモデルとしての有効性を発揮している。

以上便宜上時系列にのっとった「供養」の展開を主とし、「憑依」の認識論的問題を従としてそれに融解させる形で評者なりに本書の骨組みと興味を引いたトピックを紹介してみた。本書の特徴を一言で言えば説話集や修羅能の謡曲など二次資料を題材とし、「供養」と「憑依」をキーワードとしてその主な問題系を貫く比較宗教学あるいは宗教史のひとつのモデルを提示した野心的な著作、ということになるうか。後者は通時的な比較であり、前者は共時的な意味合いを含むとすれば、本書の本来的な目的は、通時と共時の比較にある、といっていいたいだろう。「供養」と「憑依」という日本発の比較の参照点（この枠

組みを著者が受け入れるかどうかかわからないが）の提出という野心的な試みの革新性はどれだけ評価しても評価のしすぎにはならないだろう。

その背後には、仏教だけでなくキリスト教やイスラームなども各地の土着「個別取引」との接合やその中間形態である「煉獄」のようなものが報告されている事実裏書された普遍論と、現象的には「憑依」「祟り」などの回路で表現されたはずの「個別取引」の意味領域のヘゲモニーを奪い合う階級闘争の歴史観が底流している。「苦しむ死者」「恐ろしい憑依」など情感のこもった形容はかえって比較を妨げはしないかと評者は危惧するが、異なる時空と主体の間を「個別取引」をパラメータとして往来する準備が整ったわけである。

通時・共示双方を見渡そうとする二つの意味での比較の視野を併せ持っている野心的なこの試みに対し、浅学を省みずひとことしたい。文化人類学を専攻する評者は、個人的には多様な地域の文脈と比較参照点としての根拠を十分検討することなしに行われる比較には、魅惑されつつもやはり抵抗を覚えた（著者は仏教とは何のかかわりもない行為に「追善」という語彙を用いる人類学者に苛立っているかもしれない）。本書で言及される地域単位は日本を中心としつつもアメリカやチュニジア、ヨルダン、ブルネイ、中国、ロシア、ラテン・アメリカのボリビア、メキシコ、アンデス、古ゲルマンに渡る。最後のアンデスと古ゲルマンは歴史上の地域であり、その他も国や民族、村落など比較される地域の単位がまちまちなのはやはり気になる。分析の対象も民俗宗教を軸にしながらも、世界宗教（仏

教、キリスト教とその一部の聖霊運動、イスラームなど）も含み、その担い手の単位も律令下の新興中層民、貴族、武家、近世庶民、国家権力まで幅広く、場合によっては国民、ある宗教の信者、社会階級などが集団の単位として疑問なく並列されている。時代も中世を中心としつつも古代から近世、現代まで実にさまざまである。資料も説話集が圧倒的に多いが修羅能の謡曲、百物語など怪談文学、新・旧約聖書、カリスマ運動のリーフレット『ベテルレポート』、『アイスランド・サガ』、ダンテ『新曲』まで多岐に渡っている。文学作品のほかにも、他の研究者の報告などさまざまな種類の二次資料を用いているが、著者自身の一次資料も時折姿を現す。議論の展開形式と著者の目線にも振幅が見られる。二つのシステムのモデルとしての妥当性を時系列のなかで検証する前半部（第一章から第三章）の著者の目線と、第五章以下で憑依の認識論的見直しを求める目線との隔たりは決して小さいものではない。前半部のまとまりと比べると第四章の性格、そして後半部の議論の結合の度合いはかなり幅のあるものとなっている。

資料や対象あるいは議論が多岐に渡ることそれ自体を問題にしているのではない。一言で言えば博覧強記、ということになるのだろうか、こうした欲張ったコンテンツはどうしても文脈を複雑化させずにはおかない。結果として本書の記述はどこか、何についてどのような時代背景の現象が、こういった資料に基づいてどのような立場から論じられているのか、読者に常に意識しておくように要求することになった。地の文に解釈や議論が融合しがちなこの本書のスタイルは、著者とともに異なる

る時空と主体の間を自由に往来する旅に誘うには、少し不親切かもしれない。編集の技術的な工夫でなんとかもつと親切なガイドラインは作れないものだろうか。ここには比較の困難をとりまく根本問題のひとつも潜んでいそう。もつとも、これらのことは、本書が提示しようとする通時・共時を乗り越える比較の視点という試みの革新性からすれば取るに足らないことではあるのだが。

こうした指摘は即座に著者の反論を招くだろう。そういった枠組みや名づけ、さらにはジャンルわけで隠蔽され、捉えきれない比較の窓を広げようとするのが本書だ、と。実際そうした問題意識で本書は構想されている。

著者のいう「うらみ苦しむ死者への対処法という小さな窓口を通して」「祟り」「供養」「憑依」などが密接につながり合う世界を眺めてみよう、（中略）その小さな窓の奥には、比較宗教学の豊かな課題が広がっていることを、明らかにしてみたい」（一一―一二頁）という課題は、ひとまず達成されたといっている。いろいろな関心を持つ読者にそれぞれの風景をその窓の外に見せる幅を持つ本書の登場を心から歓迎するとともに、次の段階として、本書で提出されたさまざまな問題系が、それぞれの形でそれぞれの場で結実することを願ってやまない。